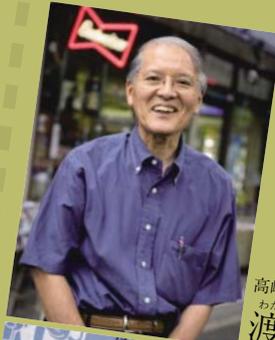


歴史に酔わせる 創業250年の酒店

高崎屋商店

「たしかに最初は肩の荷が重かったですね」と渡辺氏は笑う。この「肩の荷」とはつまり歴史のことである。高崎屋商店の創業は江戸の宝暦年間(1751-64)。酒の販売を中心に醤油や味噌などを扱い、堅実な商いで大きく店を繁栄させたが、質素儉約を強要する天保の改革で豪華な店構えが縮小された。その取り壊しの前に当時の店主が描かせた「高崎屋絵図」(1842)が今も残っている。

また旧中山道(現本郷通り)と岩槻街道の分かれ目に位置した高崎屋の前には、幕府の命で設置された一里塚が建っていた。最初は榎、次に庚申塔、最後は塞大神碑が立てられたが、道路拡張のため碑は根津神社に移された。この碑の保存に尽力したのが渡辺氏の祖父にあたる渡辺仲蔵氏だ。その事情は息子である兼男氏の著した回想録「桐の花」に詳しい。「桐の花」にはまた昭和初期の一高記念祭の様子なども活写されている。「酔っ払ったら彼らに聞いたところで分かる筈もなく...だから記念祭が近づく店の人達は、何かの注文でも何時か何処へお届けして誰からお金を頂戴するかを確かめてからお受けしないと...とか細かい戦術を相談する。...『酒3本届けてくれ』と



高崎屋商店ご主人
わたなべ やす お
渡辺泰男氏



量り売り用の徳利など
(江戸時代)



農学部正門前に立つ現在の高崎屋



大正時代の高崎屋

言われ『はい』とばかりに届けに行くと『小僧よく来た』とばかりに酒をひたつられお金は『後で』と...』(p.61)。

西川教授がかつて深夜の実験室で酌み交わしたという酒にもこうした伝統がかすかに香っていたのだろう。「でも最近では女子学生が増えたせいか、昔のように飲む学生は少なくなりました」と言って渡辺氏は笑った。



高崎屋を象徴する瓢箪の置物
(江戸時代)



「高崎屋絵図」(1842年)



根津神社に移された一里塚